ヒグマ皮の敷物　～志発島出身の臼田　春美さん～

臼田春美さんは、歯舞群島志発島のモトモシリに、お父さんの勇次郎さん、お母さん、男三兄弟の五人家族で住み家業はコンブ漁を行っていました。

昭和二十年九月、ソ連軍が侵攻してきて、何をされるかわからないという怖さに人々は次々と脱出していきました。臼田さん宅には発動機船があり脱出することは可能でしたが、お父さんが兵隊に行っていたため島に留まりました。その後お父さんは島から脱出した人たちが財産を取りに戻る船に便乗して帰ったので、十月頃に脱出を図りましたが、ソ連兵に見つかり拿捕されてしまい島に戻されました。お父さんは択捉島に連れて行かれサケやマスの燻製を作らされ、遡上が終わった十一月頃に志発島に戻ってきたとのことです。

臼田さんの船はソ連に没収されてしまったため、その後脱出することはできず昭和二十三年の強制引き揚げにより樺太経由で根室に引き揚げてきました。

「国後島にはこんなに大きなヒグマがいたんだ」このヒグマの皮の敷物は三男の誠治さんが国後島の人から譲り受け保管していたもので、爪や顔もしっかり残っていてとても迫力があります。チョッキは誠治さんが譲り受けたヒグマの毛皮から作ったもので、随分お金がかかったよと笑いながら話してくださいました。ヒグマの毛皮のチョッキということでとても珍しいものです。